HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	建国神話の政治学 : 檀君神話を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	北山, 祥子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14178号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80072
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shoko_Kitayama_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：北山　祥子

学位論文題名
建国神話の政治学―檀君神話を中心に

本論文の観点と方法

本論文は建国神話にかかわる国家的、民族的プロジェクトに関する研究である。特に、朝鮮の建国神話である檀君神話を中心に据え、日本と朝鮮との間にみられたせめぎ合いに注目する。

近代において、檀君神話は日本の歴史家たちの重要な関心事の一つであった。彼らの研究や歴史の教育現場において檀君神話が史実でないものとして否定されたことはよく知られている。ただ、両国の建国神話にかかわるせめぎあいの実態やそれが引き起こした諸矛盾については、なお課題が残されている。

本論文の方法は次のとおりである。第一に、近代における檀君神話に対する日本人の歴史学者たちの干渉の淵源を探るべく、檀君神話への関心を 16 世紀に始まる長い歴史の営みとして捉え直す。第二に、ネーション・ビルディングの視座から、本国と植民地の建国神話にかかわるせめぎ合いを明らかにする。第三に、国民国家形成に不可欠とされる建国神話とのかかわりにおいて、実証主義を旨とする近代の歴史学者が抱え込んだ矛盾を浮き彫りにするために、当時の「純正史学」と「応用史学」をめぐる議論に着目する。第四に、日本で近代歴史学を学んだ韓国の代表的な歴史学者・李丙燾に焦点をあて、建国神話をめぐる激しいせめぎ合いの刻印をあぶり出そうとする。本論文は以上の方法により、日本と朝鮮を事例として、国民国家が権力や国民を作り出したり、他民族との支配関係を安定させたりする際に作動する、建国神話にかかわる国家的、民族的プロジェクトのせめぎあいの実態と、それが引き起こした諸矛盾を明らかにすることを目的とする。

本論文の内容

序章では、問題意識と論文の目的及び方法論が述べられた。

第１章では、檀君神話を初めて収録した撰者である高麗の一然とその著書『三国遺事』、正史とされるものでありながら檀君神話が収録されなかった『三国史記』とその著者の金富軾、について論じる。日本では白鳥庫吉を嚆矢とする、仏説を根拠とした『三国遺事』の否定があり、それにより、檀君が否定された。他方、植民地期の朝鮮の歴史家の間では、逆に檀君神話を収録しなかった金富軾が強く否定された。本章では、このことを明らかにすることにより、まず撰者をめぐって日朝対立があったことを浮き彫りにした。また、高麗が事実上蒙古の支配下に置かれた状況にあって、一然の『三国遺事』は、危機に瀕した高麗人のアイデンティティにかかわる試みであったと推論した。

第２章では、ネーション・ビルディングの視座から、記紀神話の「一国一神話化」について論じる。大日本帝国憲法に大きな影響を与えた記紀が、既存の史書を天皇家の都合に合わせて編纂し、編纂当時の政治思想や宗教思想によって潤色されたものであったことを、先行研究に基づいて確認するとともに、戦後の研究成果を元に、かつて存在した多くの神話群が、すでに記紀の成立期に抹殺されたことを明らかにした。さらに、記紀が宗教思想によって潤色されたとする先行研究の指摘を援用し、日本人歴史学者によって否定された植民地朝鮮の檀君神話の宗教色と同じ問題が実は記紀にも存在したことを浮き彫りにした。

第３章では、日本における檀君神話への関心の起源と「檀君論争」について論じる。まず、日本では、『東国通鑑』が朝鮮通信史、または文禄・慶長の役によってもたらされ、檀君を朝鮮の祖として認識されたが、朝鮮では檀君が忘れ去られ、祭祀や土着的信仰として存在したことを確認し、

檀君否定論について時期をさかのぼって、林羅山を起源として位置づける。ただ、林羅山の場合、荒唐無稽な神話を否定する立場であったため、日本の神話だけが肯定されることはあり得ず、その点で近代歴史学と決定的に違っていたことを指摘した。この指摘は、日本の近代歴史学の矛盾を浮き彫りにするものである。さらに、檀君否定に対する反論として出された朝鮮人による檀君擁護論を考察する。朝鮮では、1904 年の崔南善による『三国遺事』の再発見を起点として、祭祀や土着的信仰の対象だった檀君を民族の始祖として位置づける檀君「再生作業」が始まる。しかし、朝鮮を植民地とした日本では、独自の建国神話をもつ朝鮮が、「一国一神話化」の新たな課題として浮上し、檀君神話は継続的に否定され、その動きが朝鮮の民族的プロジェクト（朝鮮の「一国一神話化」）を抑圧した。以上の指摘により、日本の近代の「一国一神話化」は、朝鮮に衝撃を与えることで朝鮮民族主体の「一国一神話化」の希求へとつながると同時に、それを抑圧するものとしても働いたことを明らかにした。

第４章では、独立後の韓国でその学説を「植民史観」と評された李丙燾を取り上げる。本章では日本で歴史学を学び、実証主義史学と民族主義史学の間の板挟みの状態にあった彼の死の間際までの仕事の中にあった、建国神話をめぐる激しいせめぎあいの刻印をあぶり出した。

第５章では、植民地朝鮮における檀君神話の解釈に大きな影響を与え、近代日本の歴史学を二分した「純正史学」と「応用史学」を取り上げる。本章では、第一に、アカデミズム史学における「応用史学」の差別化の実態と「純正史学」から切り離された「応用史学」が教育の現場において自立化していく過程、第二に、「応用史学」論に則る歴史叙述をめぐって教育現場で起こった混乱と反発を論じた。また、黒板勝美の『国史の研究』を取り上げ、黒板が記紀における「史的現象」を認めることによって、皇室中心主義に結びついたことを指摘し、「応用史学」を批判したはずの「純正史学」が「応用史学」論的な歴史認識を内包していたことを明らかにした。これにより、日本ではアカデミズム史学が教育としての国史を担当することとなった「応用史学」から距離を作ろうとしたにもかかわらず、韓国では等しく「植民史観」として批判される矛盾の背景が明らかとなった。

第６章では、朝鮮総督府の修史官として朝鮮史編纂事業に携わった中村栄孝を取り上げる。歴史学者として植民地官僚となった中村を朝鮮史編纂と国史教科書改訂という連続する事業にかかわり、朝鮮総督府の「国史」の戦略を体現していた人物として位置づける。総督府はまず、「皇国臣民」を作るために必要な国史教科書を編纂する前に、日本の近代歴史学を総動員して『朝鮮史』の編纂を行い、その編纂において檀君神話を正史として扱わないと決定することによって、国史教科書に朝鮮の建国を記述する必要性を消去した。中村の仕事に注目し、総督府がこの一連の事業によって、朝鮮の建国神話の存在によって権衡を失し、歴史教育の効果が阻害される問題を解決したことを論じた。

第７章では、朝鮮総督府編纂の『初等国史』を取り上げる。根底に「神話」や「皇室」の存在を抱え込んだ「純正史学」と「応用史学」に注目し、『初等国史』編纂において、国史教科書に内包された「応用史学」を排除するとしながらも、「皇室中心」、「天皇中心」の歴史叙述に拘泥した結果、結局「純正史学」がもつ「応用史学」的な解釈から脱することができなかった実態を明らかにした。

終章では、各章の論旨をまとめ、本論文の意義と今後の課題及び展望が述べられた。